



Title	ストラッティス断片訳注余滴
Author(s)	平山, 晃司
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 39-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ストラッティス断片訳注余滴

平山 晃司

以下に掲げるのは、筆者が『ギリシア喜劇全集 9 群小詩人断片Ⅲ』（中務哲郎・西村賀子・マルティン・チエシュコと共訳。岩波書店 2012 年刊）のために作成したストラッティス（アテーナイの古喜劇詩人。前 410 年頃～前 375 年頃に活躍）の主要断片の訳注のうち、頁数縮小のためとて収載されなかったものに加筆・修正を施したものである。

凡 例

一、底本は R. Kassel et C. Austin (edd.), *Poetae Comici Graeci*, vol. VII (Berlin / New York 1989)。ストラッティス以外の喜劇作家に言及する際も、その断片のテキストと番号は Kassel-Austin のそれに従った。

一、断片は以下の形式に従って按配した。

劇の題名（邦題および原題。後者のアルファベット順に配列）

作品解説

断片番号（ストラッティスの全断片に付せられた通し番号）

断片本文の翻訳

その断片の出典

注（必要に応じて）

一、断片全体を《 》で括っている場合は、それが原文そのものではなく、間接的言及であることを示す。

一、出典においては、必要に応じて前後の文脈も紹介した。当該断片が引用された位置が明示できる場合は、「【本断片】」としてそれを示した。

『アントローポレステース』 ANΘΡΩΠΟΡΕΣΤΗΣ

タイトルの意味は「人間（としての）オレステース」と解しうるが、不詳。なお、ペレクラテースに『アントローペーラクレース（人間としてのヘーラクレース）』という名の劇がある。

2

とびきり上等の小麦粉で作った、形がそっくりな二つのパンの

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』127c。

注 「パン」と訳した ἔκγονος（エクゴノス）は、字義通りには「子供、所産」の意。この語を原料に対する製品の意味で用いた例はピリュッリオス断片 4 にも見える：「私は春小麦の粉で作った（πυρῶν ἐκγόνους τριμήνων）乳のように白いほかほかのロールパンを手ずから携えてやって参りました」。

『アタラントス』または『アタランテー』（または『アタランタイ』）

ΑΤΑΛΑΝΤΟΣ / ΑΤΑΛΑΝΤΗ (ΑΤΑΛΑΝΤΑΙ)

アタラントスは駿足で知られたアルカディアーまたはボイオーティアーの女狩人の名アタランテーを男性形にしたもの。アタランタイはアタランテーの複数形。アリストパネース『蛙』146 行への古注によると、本劇が舞台上に上せられたのは『蛙』（前 405 年上演）の「ずっと後」のことであったという。具体的

には詩人の最晩年、前 380～375 年頃と考えられる。なお、アレクシス、エウデュクレース、ピレタイロス、ピリュッリオスに『アタランテー』、エピカルモス、ポルモス、カッリアースに『アタランタイ』という作品がある（ポルモスのそれを『アタランテー』とする伝えもある）。

5

鮪の下腹肉少々と、1 ドラクメーの
豚足 1 本

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』302d, 399d。

注 断片 32 でも言及されている鮪の下腹肉（いわゆる大トロの部分）は、高級食品として美食家の間で珍重されていた。エリポス断片 3 では「貧乏人が買えないもの」の一つとして挙げられ、アリストパネース断片 380 とエウブーロス断片 36 では、並べ立てられる珍味の中にこれが含まれている。アンティパネース断片 190 では、大枚をはたいて遊女にこれを買ひ与える男が非難されているようである。柔らかく煮た豚足もまた珍味として知られていた。

『炎に包まれるゾーピュロス』 ΖΩΠΥΡΟΣ ΠΕΡΙΚΑΙΟΜΕΝΟΣ

主人公はおそらくアテーナイの人相学者ゾーピュロスであろう。キケローによると、彼はソークラテースの容貌から割り出した性格上の欠点を幾つか指摘したが、それらはすでに克服されたものばかりであったという（『運命について』10、『トゥスクルム荘対談集』4. 80）。本劇はスピントロスの悲劇『炎に包まれるヘーラクレース』のパロディかもしれない。

10

俺はエピクラテースがそのうちの一人だなんてこれっぽっちも思っちゃいないぜ。

出典 ヘーシュキオス『辞典』o 1764 : 「たったの一キッカスすら」。「まったく…ない」を意味する諺。「買い手の姿などただの一人も見当たらない」。また、ストラッティスの『炎に包まれるゾーピュロス』には【本断片】とある。

注 極小のもの、無価値なものを意味すると考えられる κικκάς (キッカス) という語は、同様の意味を持つ κικκάβιν (キッカビン。ヘーシュキオス『辞典』κ 2648)、κύκκαρος (キュッカロス。同、κ 4465) との関連が推測され、冥府における貨幣の最小単位を表す κίκαβος (キッカボス。ポルルクス (ポリュデウケース)『辞林』9. 83 によると、ペレクラテースが『クラパタロイ』という劇の中で言うには、1 クラパタロス (雑魚の一種、転じて愚か者の意) は冥界における 1 ドラクメーで、これは 2 プソーティアー (焼き上がったパンの底面に生ずる気泡の意) に等しく、1 プソーティアーは 3 オボロスあるいは 8 キッカボスに相当するという) の同義語とも見なされるが、確証はない。最初の用例「買い手の…」は作者不詳の喜劇断片か。エピクラテースはアテーナイの政治家で、前 394/3 年にポルミシオスとともに使節としてペルシア王の許に派遣されたが、多くの贈り物で買収された (アテーナイオス『食卓の賢人たち』251a-b、プルタルコス『対比列伝』「ペロピダース」30. 12)。喜劇作家プラトーンの『使節たち』という劇は、この収賄事件を扱ったものと考えられる。彼は前 392/1 年のスパルタとの和平交渉および前 387/6 年の「大王の和平」の際にも使節を務め、そのいずれかにおける何らかの振る舞い (収賄?) を理由に死刑判決を受けたものの、国外へ亡命した (デーモステネース第 19 弁論『使節職務不履行について』277、ピロコロス断片 149a Jacoby)。

『カッリッピデース』 ΚΑΛΛΙΠΠΙΔΗΣ

カッリッピデースはストラッティスと同時代に活躍し、絶大な人気を博した悲劇俳優。前 418 年のレーナイア祭で最優秀俳優賞を獲得。アイスキュロスの後期の作品において俳優として活躍したミュニコスは彼を、その過剰な演技ゆえに「猿」と呼んだという (アリストテレース『詩学』1461b)。

では、まず彼にこの極上粗碾き粉のケーキを差し上げなさい。

出典 ポーティオス『辞典』α 1285。

注 断片 12「彼はあつという間に魚の切り身と／熱々の猪肉のステーキを搔っ攫い、それらを全部いっぺんに貪り食った」と同じく、本断片の「彼」もまた、喜劇においてしばしばその大食ぶりが笑い種とされるヘーラクレスであるかもしれない。

『キーネーシアース』 KINHΣΙΑΣ

キーネーシアース（前 450 頃～前 390 頃）はアテーナイのディーテュランボス詩人で、同ジャンルの革新者の一人（アリストパネース『鳥』1372 行以下、ペレクラテース断片 155. 8-12 行参照）。喜劇詩人らは彼の瘦身長軀と神々に対する侮辱的行為をしばしば揶揄し、弁論家リュシアーヌスも彼を不敬極まりない人物として論難している（断片 195, 196 Carey）。

《彼（＝ライスポディアース）はまた、ストラッティスが『キーネーシアース』の中で言っているように、両脚の脛にちょっとした障碍を抱えてもいた。》

出典 アリストパネース『鳥』1569 行への古注。

注 ライスポディアースはアテーナイの将軍、政治家。前 414 年夏、30 隻からなるアテーナイ軍の艦隊が、スパルタ軍の侵攻に遭ったアルゴスを救援すべく出動し、ペロポネネーソス半島南東部沿岸の諸都市を襲撃したが、このときの司令官の一人が彼であった（トゥーキューディデース『歴史』6. 105. 2）。アンティポーン『ライスポディアース弾劾』（断片 21-24 Thalheim）は、トラキア地方における何らかの活動に関与した廉で（デーロス同盟への貢租支払いをめぐって同地のポリスと何らかのトラブルを起こしたためか）彼を告発したものであろう。前 411 年、四百人議会は彼を他の 2 名とともに使節としてパラロス号に乗せてスパルタに派遣したが、船の乗組員らは彼らの身柄を拘束してアルゴスに引き渡した（トゥーキューディデース『歴史』8. 86. 9）。ライスポディアースのその後の消息は一切不明。

下腿が不格好（畸形？）であることが喜劇においてしばしば嘲笑の的となったが、彼は着物の裾を踝まで垂らすことによってその欠点を隠していた（アリストパネース『鳥』1567-9 行：「おい、何をしてるんだ。そんなふうにマントを右から左に垂らしたりして。／羽織り方を変えたらどうだい、こういうふうに左から右にさ。／なんでそうなるんだよ、情けない奴だな。お前はライスポディアースみたいな体つきなのか？」；テオポンポス断片 40；エウポリス断片 107）。不格好な脚を着物で覆い隠すという話の類例は、『アイソーボス伝』G 21 (Perry)、クインティリアヌス『弁論家の教育』11. 3. 143 などにも見える。ライスポディアースの下腿は単に目立って細かったにすぎず、彼はその痩せた貧弱な脚ゆえに将軍たるに相応しからざる人物として揶揄されているとも考えられるが、作者不詳喜劇断片 380（＝ヘーシュキオス『辞典』λ 158）では、「鎌のような形の足をしている」（τὸν δρεπανώδεις πόδας ἔχοντα）と言われている。喜劇における脚の醜さに対する揶揄の例としては他に、プラトーン断片 65, 1-4「お前には見えないのか、／レアグロスこと、グラウコーンの大いなる一族の／〈間抜けの〉愚かなカッコウがうろつき回っているのが。／末生りの瓢箪みたいな足のくせにな」、同 200, 2-3「エウアゴラースの子キーネーシアースは、胸膜炎のせいで／痩せこけて尻がなく、脚も葦のよう」（ともに西村賀子訳）など。

《塑像制作者がその周りに粘土を塗り付けて肉付けをする木の骨組みをカナボスと称する。それゆえストラッティスは『キーネーシアース』の中でサンニュリオーンのことを、その身体の細さ

ゆえにカナボスと呼んでいる》

出典 ポッルクス（ポリュデウケース）『辞林』10.189。

注 サンニュリオーンは前5世紀末に活躍したアテーナイの古喜劇詩人。その瘦身がしばしば他の喜劇詩人らによって揶揄された。

『レームノメダー』 ΔΗΜΝΟΜΕΔΑ

タイトルの意味を「レームノスを統べる女」と解すれば、本劇はレームノス島の女王となったヒュプシピューレーの伝説に取材した作品だと考えられそうである。一方、これを「アンドロメダー」の振りで見なす解釈もある。前394年、アテーナイの将軍コノーネがペルシア海軍を率いてクニドス沖でスパルタ軍の艦隊を殲滅、アテーナイ市民は失っていたレームノス島を奪還し、再入植した。コノーネの戦功によってスパルタのエーゲ海に対する制海権という軛から解放され、再びアテーナイの支配下に入ったレームノス島を、アイティオピアの王女アンドロメダー（海の怪物への生贄として鎖で岩に繋がれているのを英雄ペルセウスが発見、解放し、妻とした）に擬えたと考えられるわけである。この考えが正しければ、本劇の上演年代は前392年頃と推定される。なお、『スーダ辞典』は『リムノメドーン』と、アレタース（断片24）は『リムノペダイ』と、それぞれタイトルを誤って伝えている。

26

彼は大きな鯛をしこたま食い食うと、

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』327e。

『マケドニア人』または『パウサニアース』 ΜΑΚΕΔΟΝΕΣ / ΠΑΥΣΑΝΙΑΣ

パウサニアースは美貌の悲劇詩人アガトーンの愛人。両名はプラトーンの対話篇『饗宴』に登場する。アガトーンは前406年にパウサニアースを伴ってマケドニアのアルケラーオス王の宮廷に赴き、前400年頃に他界するまでその地で暮らした。したがって本劇の上演年代としては、パウサニアースがマケドニアへ渡った前406年頃と、彼がアテーナイに帰還したと推測される年、すなわちアガトーンの没年である前400年頃が候補に挙がるが、断片27で言及されている遊女ラーイスの生年が前422年であることを考慮すれば、後者のほうがより蓋然性が高い。

29

(A) で、そのスピュライナってのは何なんだい。

(B) あんたがたアテーナイ人はケストラーと呼んでるね。

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』323b。

注 スピュライナ（ケストラー）は鰯の一種。話者Bの台詞はマケドニア語を模したと思しき方言で書かれている。

30

では、そのような蒸し煮にした………をたっぷり召し上がって
いただかねば。

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』396a。

それに鮪の美味しい下腹肉も

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』302e。

注 鮪の下腹肉については断片 5 を参照。

『ミュルミドネス』 ΜΥΡΜΙΔΟΝΕΣ

ミュルミドネスとはアキッレウスに従ってトロイアーに遠征したプティアーの住民のこと。本劇はアイスキュロスの同名の悲劇のパロディかもしれない。喜劇ではピレーモーンに同名の作品がある。

全軍が毎日ただで浴場で汗を流し、
鉄の鏹銭……枚で……

出典 ポッルクス（ポリュデウケース）『辞林』9.78。

注 2 行はテキスト不全。「鉄の鏹銭」と訳した σιδάρεοι（シダーレオイ）はビュザンティオンで流通していた鉄銭。

『ポタモス区の人々』 ΠΟΤΑΜΙΟΙ

ポタモスはアッティカの区（デーモス）の一つ。ホメーロス『イーリアス』24. 545 への古注によれば、この名を持つ区は 2 つあり、それぞれ「上ポタモス」「下ポタモス」と呼ばれていたという。ハルポクラティオン『アッティカ十大弁論家用語辞典』p. 255, 8-10 (Dindorf) およびヘーシュキオス『辞典』8. 2415 によれば、この区の人々は不法登録者を容易に受け入れるとして嘲笑の的になっていたという。

鰻の従兄弟

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』299b。

注 形状が鰻に似た何らかの生物（穴子など）を指して言ったものか、特定の人物に対する嘲弄か（メナンドロス断片 224. 14 では、美食家として知られた弁論家のカッリメドーンが「鰻の親戚」呼ばわりされている）。

『ピューティソス』（？） ΠΥΤΙΣΟΣ

ストラッティスの作品名としてこの表題を伝えるのは断片 41 の出典のみ。おそらくは古注家が誤りを犯したか、伝承の過程で何らかの手違いが生じたのであろう。

「分かってるって！」エピニーコスの奴、気色ばんでこうぬかしおった。
「この口でやってやるさ。ああ、〈レスボス人お得意の〉やつをな」

出典 アリストパネース『蜂』1346 行への古注。レスボス島がフェラチオのメッカと目されていたことを示す一例として本断片を引く。

注 1 行前半はテキスト不全につき推定訳。2 行は Dindorf および Dobree の補填案に従う。

『涼を求める人々』 ΨΥΧΑΣΤΑΙ

太陽の下で額に汗して働くことを厭い、日陰で涼しい風に当たりながら飲食を楽しむなどして放縦に時を過ごすことを信条とする人々がコロスとして登場する劇か。

57

サンニュリオーンの革製の^{すけて}助手を

出典 アテーナイオス『食卓の賢人たち』551c。サンニュリオーンが痩せっぽちであったことの証左として本断片を引く。

注 サンニュリオーンについては断片 21 を参照。「革製の助手」(σκυτίνη ἐπικουρία)とは、彼が自分の体つきを少しでも逞しく見せようとて身に着けていた胸当てのことか(Dalechamps)、はたまた観客の笑いを取るべく俳優らに着用させた巨大な男根のことか(Bergk)。後者の場合、アテーナイオスは本断片を引用する際にコンテクストを誤解したことになる。いずれにせよ、この言葉は「焼け石に水」に相当する σκυίνη ἐπικουρία (字義通りには「無花果の助け」。無花果の木が折れやすく、利用価値がないことから) という諺にかけた洒落であり、サンニュリオーンの努力が奏功しなかったことを示している。

58

いっそ誰かが私のために持ってきてくれればいいのに。……
……熾し炭で一杯の火鉢をここへ。

出典 ポッルクス (ポリュデウケース)『辞林』10.101。

注 涼しさを通り越して寒さを覚えたコロスの一人(?)が漏らした言葉か。

作品名不詳断片

65

若い娘たちは
皆、胡座を組んで盥を両脚で抱え込むようにして

出典 ポッルクス (ポリュデウケース)『辞林』2.173。

69

私を心配事から解放してくれ。

出典 ポーティオス『辞典』α 2239。

70

彼女はどこだ。誰か連れ出してくれんか、例の双子の痩せっぽちの、
ここにはいない母親を。

出典 ヘーシュキオス『辞典』κ 3323。

注 「痩せっぽちの」はテキスト伝承不全につき推定訳。「ここにはいない」と訳した ἀποῦσαν も誤伝か（連れ出せと言うからには目当ての人物がその場にいないのは当然）。いくつかの代替案のうち最適と思われるのは ἄπυγον 「尻つぺたの薄っぺらい」。

73

《(アテーナーのペプロスが) 黄色と堇色の 2 色織りで、巨人族を描いた刺繍を施されていることは、ストラッティスが明らかにしている》

出典 エウリーピデース『ヘカベ』467 行への古注。

注 ペプロス (πέπλος) は 1 枚の布地から作られる女性用の外衣であるが、ここでは特に、アテーナイで 4 年に 1 度開催される大パナテーナイア祭においてアテーナー神殿の女神像に着せられる衣裳のこと。乙女たちが織り上げて刺繍を施し、有志の市民がこれを木の柱に船の帆のように張ったものを掲げて市中を練り歩き、アクロポリスへと運んだ。

74

《「スクニプスが腰を落着けている」。この諺は忙しくあちこち飛び回っている人々について言われたものである。スクニプスは木を食べる虫で、ある場所から別の場所へ飛び跳ねて移動することから、かく言われる。ストラッティスがこの諺に言及している》

出典 ゼーノビオス『俚諺集』(ウルガータ本) 5. 35。

注 スクニプス (クニプスとも呼ばれる) なる虫に関する古代の証言はまちまちで、樹皮の下にいて啄木鳥の餌になる虫 (アリストテレス『動物誌』593a および 614b) あるいは小さな蟻のような虫と説明されたり (同『感覚について』444b)、蛎に似ていると言われたりする (『スーダ辞典』σ 640)。引用された諺 (字義通りには「スクニプスが本来の居場所に」) は、「どういう風の吹き回しか」といった意味で皮肉を込めて用いられたものであろう (Kock)。

75

《「鼯に肌着」。この諺は「サフラン色の衣は鼯には似合わない」という諺と同義である。これはアプロディーテーの神慮によって人間の女の姿になった鼯が、サフラン染めの衣を纏ったまま鼠に跳びかかったという故事による。ストラッティスがこの諺に言及している》

出典 ゼーノビオス『俚諺集』(ウルガータ本) 2. 93。

注 諺の由来として挙げられている話は『アイソーポス寓話集』50 (Perry) とバブリオス『アイソーポス風寓話集』32 にも見えるが、それらは女の衣服には言及していない。

参考文献

Miles, S., *Strattis, Tragedy, and Comedy* (diss. Nottingham 2009).

Orth, C., *Strattis. Die Fragmente: Ein Kommentar* (Berlin 2009).

Storey, I. C. (ed., tr.), *Fragments of Old Comedy*, vol. 3 (Cambridge, Mass. / London 2011).